

# Nara Women's University

飛鳥・藤原京と平城京一七・八世紀の都と舒明王朝

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学21世紀COEプログラム 公開日: 2011-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子,裕之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/2735">http://hdl.handle.net/10935/2735</a>

# 飛鳥・藤原京と平城京

## —七・八世紀の都と舒明王朝—

金子 裕之

### 1. 飛鳥への道

大陸列島の日本は中国大陸からやや離れているが、東アジアの動向とは常に関わりがある。古代でも中国大陸における隋の南北朝統一（589）と、それを契機とする東アジア動乱の開始は甚大な影響をもたらせた。王権は難を避ける目的から、6世紀の王朝が依拠した広闊な磐余の地（現在の桜井市西南部、後の藤原京左京域に重なる）からその南西に位置する狭隘な飛鳥の谷へと移動した。

古代の飛鳥は非常に狭く、香具山以南、橘寺以北の飛鳥川右岸を指した<sup>(註1)</sup>。ここは東から南が多武峯山系に、西は甘檜岡に連なる丘陵という天然の羅城に囲まれた要害の地であり、広闊で東西交通至便な磐余からこの地への移動は東アジア動乱を睨むものだった。

飛鳥に移動した最初の王権は女帝推古である。敏達皇后の推古ははじめ飛鳥の西北に位置する豊浦宮（現明日香村豊浦）に即位し（592〈崇峻5〉年）、次いで603（推古11）年に飛鳥川を隔ててその東方にあたる小墾田宮に遷った。小墾田宮の所在地については岸説の飛鳥川左岸説が有力だったが、その後の発掘調査などによって、現在では飛鳥川右岸の「雷丘」（明日香村雷）周辺の雷丘東方遺跡が有力である。

ここは飛鳥の北端に近く、飛鳥と磐余、軽（現在の橿原市軽）を結ぶ幹線道路の阿倍山田道に直接する。この宮の構造はまだ明らかではないが、飛鳥を冠する飛鳥時代とは狭義には推古朝（592-628）のことだから、女帝が飛鳥時代の開幕を告げたことは間違いがない。しかし、小墾田宮からさらに飛鳥の谷奥に入りこんで本格宮殿を建設して谷全体を宮と寺が集中する都（ここでは飛鳥京という）とし、後に巨大な条坊制都城である藤原京（694-710）を建設するのは、次の舒明天皇とそれに連なる血筋の人々だった。

推古の死後、ライバルだった山背大兄（聖徳太子の息）を滅ぼし、629年に即位した舒明（田村皇子）は即位の翌年に飛鳥岡本宮（630）を造営し、小墾田宮から移った。平安時代初頭まで皇統が続く舒明王朝ともいべき時代の開幕だった。

ここでは観点を変えて、最近の万葉集研究の成果からみてみよう。

### 2. 持統女帝の国家観

関連するのが原万葉集に関する研究である。原万葉集とは、万葉集全20巻の成立過程に関する鍵語のひとつである。万葉集20巻はすべてが一時期に成立したのではなく、収載歌には前後100年以上の時間差がある。

江戸期の契沖ははやくに巻第1から巻第16までと、巻第17から巻第20までの二部に大別できることを指摘した<sup>(註2)</sup>。

その後、万葉集の大別や前後の部を構成する各巻の内容については精緻な研究の蓄積が進んだ。ここで問題になるのは前半の第1部である。この第1部もすべてが同時に編まれたわけではなく、幾度かの編纂過程があり、その最初が巻第1・2である。その原形が原万葉集である。

橋本達雄説によると、巻第1・2には増補や追補があるという。そこでこれらを除いたものが原万葉集となる。すなわち、「現在の巻一・二には、のちに増補された部分や、さらにはその後に追補された痕跡が顕著であるので、その増補・追補を除いた部分」である<sup>〔注3〕</sup>。

橋本説によると原万葉集は本来1巻本で117首からなり、成立は持統朝の末期。その編者は持統天皇と柿本人万呂だという。そして原万葉集の狙いについて、宮廷の偉容を示す歌々を編纂して内外に公布するとともに、若い文武天皇（当時15歳）の地位を側面から不動たらしめる意図、などがあったとする<sup>〔注4〕</sup>。

橋本説は飛鳥京や藤原京の成り立ちを考える上に興味深い。原万葉編纂の意図は橋本説の通りだろう。と同時に、持統が自らの事績を称える賛歌の意味もあったのではなかろうか。原万葉集の意図を考える上に、題詞と歌の配列が重要な意味を持つのでこの点を再確認しておこう。

原万葉集巻第1は天皇の代毎の題詞がある特異なもので、橋本説によるとその配列は、

泊瀬朝倉宮治天下天皇代（雄略天皇）

高市岡本宮治天下天皇代（舒明天皇）

明日香川原宮治天下天皇代（皇極天皇）

後岡本宮治天下天皇代（齐明天皇）

近江大津宮治天下天皇代（天智天皇）

明日香浄御原宮治天下天皇代（天武天皇）

藤原宮治天下天皇代（持統天皇）

の順であるという。

現行の万葉集における藤原宮治天下天皇代には、持統・文武天皇両時代の歌がある。この藤原宮治天下天皇代を持統天皇代とし、この後に続く寧楽の宮を含めた一部の歌を後の増補歌、追補歌として除くのである。

原万葉集巻第1が泊瀬朝倉宮治天下天皇代（雄略）に始まること、高市岡本宮治天下天皇代（舒明）がそれに次ぐことは極めて示唆的だ。

泊瀬朝倉宮治天下天皇（雄略天皇）は偉大な大王で、『日本書紀』はその御代を画期として描く。これは書紀の編纂時にそうした認識があったことを物語っている<sup>〔注5〕</sup>。あるいは壬申の乱（672）に勝利し、成立した天武朝の偉大さを歴史的人物に仮託したものであろうか。『日本書紀』は持統（高天原広野姫）天皇で全30巻を終えており、「原万葉集」と『日本書紀』とは同じ歴史認識のもとで編纂が進んだのでこれは当然のことで、いずれにしてもある種象徴として泊瀬朝倉宮治天下天皇代を劈頭に置いたことになる。そこで、原

万葉集の実質的な筆頭歌は第2番目の高市岡本宮治天下天皇代となる。

すなわち舒明天皇である。するとその御代の歌が大きな意味を持つこととなる。この歌が「天皇登<sub>レ</sub>香具山<sub>一</sub>望<sub>レ</sub>国之時御製歌」（万葉集歌番号2）である。

いうまでもなく国見の歌である。国見は土橋寛説によると、もともとは春の初めの予祝行事だったものが、天皇の行事となることで支配者の儀礼としての政治的性格を強くしたという<sup>〔注6〕</sup>。ここで香具山が登場するのはこの山が飛鳥の北端に位置し、北から飛鳥の正面を象徴するからだろう<sup>〔注7〕</sup>。

すなわち単なる新年の国見の歌ではなく、原万葉集の編者持統天皇はこれをもって舒明が本格宮殿の飛鳥岡本宮（630）を建設し、飛鳥の谷全体を宮と寺が集中する都としたこと、これを含めた新王朝の成立を高らかに宣言したのだ。

持統朝は通常は、天武朝と一体で天武・持統朝として扱うことが多い。舒明天皇を始祖とする意味をもたせたのは壬申の乱（672）に勝利した天武・持統朝であり、血統による強烈な王朝意識を前面に打ち出すことで、次に述べる飛鳥京跡Ⅲ期（後岡本宮・飛鳥浄御原宮）の整備や、のちの藤原京の建設に邁進した。

その理解のために、舒明岡本宮以下の飛鳥京跡に関する考古学の最新成果をみておこう。

### 3. 岡の飛鳥京跡

舒明の飛鳥岡本宮の所在については古くから諸説があったが、現在では奈良県明日香村岡を中心とする飛鳥京跡にあたるものがほぼ確かとなった。主に橿原考古学研究所を中心とする長い研究史はここでは省くが、この飛鳥京跡には上下三期の宮殿遺構がある。すなわち、

I期 舒明天皇の飛鳥岡本宮（630-636）

II期 皇極天皇の飛鳥板蓋宮（643-655）

III期 齊明・天智の後飛鳥岡本宮、天武・持統の飛鳥浄御原宮（672-694）

ここには二つの方位の宮殿群がある。すなわち、主軸方位が45度近くも西偏するI期の岡本宮跡と、正方位をとるII・III期の飛鳥板蓋宮および、後岡本宮・飛鳥浄御原宮である。I期の方位は「岡」東側の山麓線のあり方とほぼ一致しており、飛鳥の地形に合わせたのだろう。これに対しII期以降の正方位は北天を重視することで、中国のいわゆる天の思想だから、II期段階（皇極女帝）にこの思想が飛鳥に浸透したのだろう。

I～III期のうち全体の構造が分かるのは最上層のIII期の遺構で、掘立柱遺構による外郭・内郭の二重構造をそなえ、令制の2里（約1km）四方の藤原宮（694-710）に近い規模を備えたようだ。これに対し下層のI・II期宮殿の構造はなお明らかではない。

これは、下層遺構の調査は上層遺構を避けて行うといった制約も要因であるが、やはり中枢部の位置が微妙にずれるのだろう。大化改新の舞台ともなったII期の飛鳥板蓋宮について、林部均説はIII期遺構の東北に想定している。

I期岡本宮の中枢部はさらに東側の丘陵端に近く、現在の集落と重なる位置にある可能性がある。この飛鳥京跡の調査成果に、約1 km（令制2里）北方にある石神遺跡の調査成果などをあわせると飛鳥の宮の整備は大きく三段階があり、飛鳥京跡では舒明天皇がI期宮殿を建設して整備の先鞭をつけ、その皇后だった皇極・斉明天皇がII期宮殿の主軸を正方位を改めるとともに、板蓋宮として大規模化。最終的に、息子夫婦の天武・持統がIII期宮殿の後岡本宮・飛鳥浄御原宮として拡充整備、といった過程をたどる。

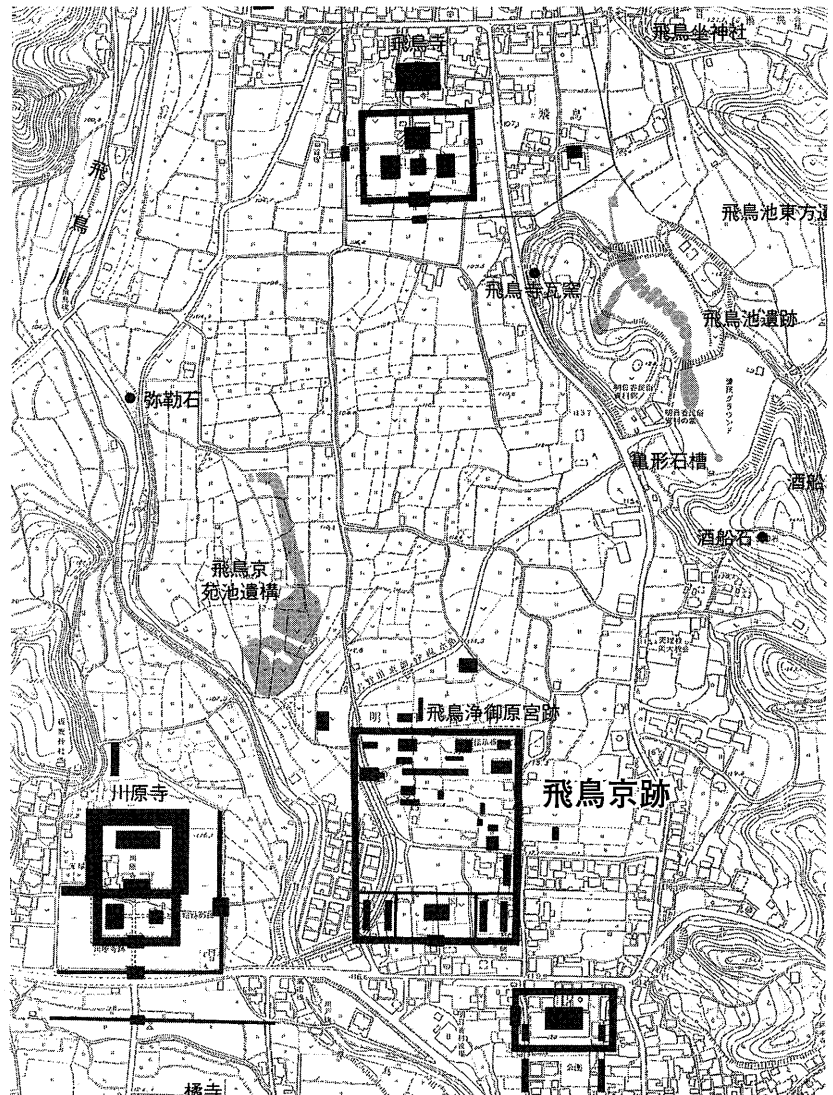


図1 飛鳥京の宮殿と寺

このうち北天重視を含め、飛鳥全体の整備が進行するのはII期の皇極・斉明女帝（重祚した皇極）だが、いずれにしても明日香村岡を中心とするほぼ同位置に、I～III期宮殿を永続的に建設したことは確かだ。これには地形的な要因も多少は絡む。

III期宮殿（おそらくII期宮殿も）は、藤原宮（694-710）に連なる構造と規模を備えた大規模なものだった。しかし、狭隘な飛鳥の谷ではこうした構造と規模を備えた大規模宮殿を置く適地は、岡周辺にしかない。ここを除くと、東・南・西いずれも天然の羅城の丘陵地にかかってしまうのだ（図1）。

なお、門脇禎二氏は飛鳥を東から南にめぐる山並みを田身山とし、ここをその一「田身嶺」に冠らしめた「周れる垣」とする<sup>〔注8〕</sup>。ここには斉明女帝が築いた（斉明2年是年条）宮東の城郭・石山丘がある<sup>〔注9〕</sup>。

しかし、地形の制約以上に重要なことは、始祖の宮を踏襲することで王権の正統性を誇

示したのだ。血統がそのことを示している。I期の舒明(629-641)以下、II・III期の皇極(642-645)・斉明(655-661)、天智(668-671)、天武(672-686)・持統(686-697)の諸天皇は血筋を同じくする(図3)。

皇極(宝)は舒明皇后であり、舒明の死後に即位し、斉明天皇として重祚する。そして中大兄皇子(天智)、大海人皇子(天武)の母である。持統は天智の皇女であるとともに、大海人皇子(天武)の妃となり、その死後に持統天皇として即位した。

このうち中大兄皇子(天智)は近江(滋賀県)の大津京に遷都(667)するので飛鳥京では実質的な意味はそれほどないが、大津京の東側は琵琶湖、飛鳥の東は多武峰の山麓であることを別にすると、両京の基本構造・配置は一致する。

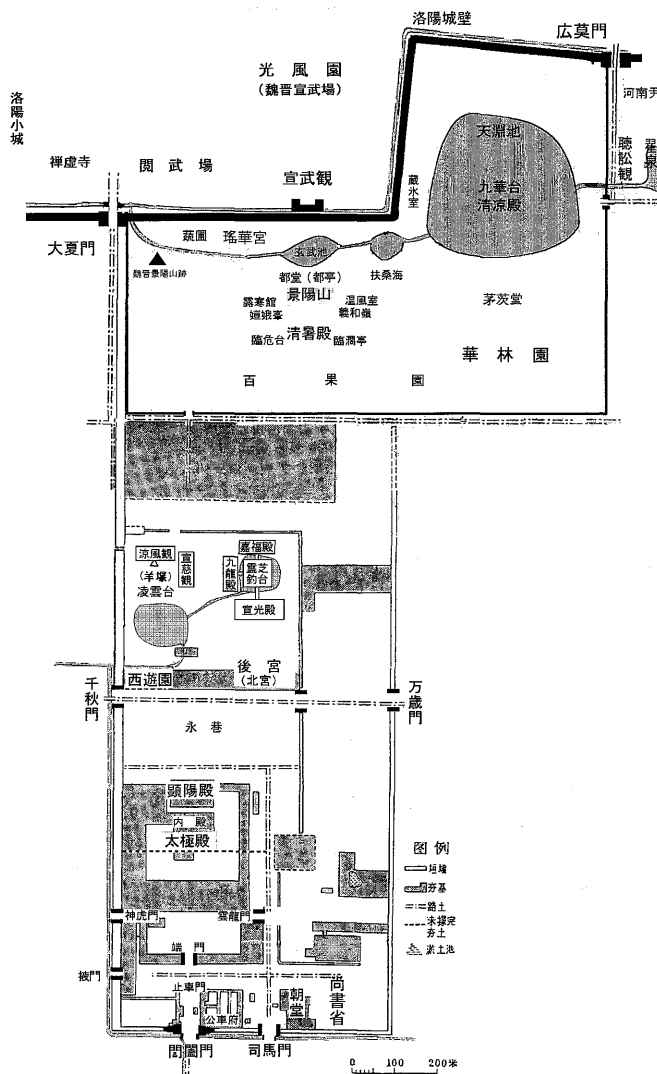


図2 北魏洛陽城の宮図

いずれにしても、彼らを含めここに継続して宮を造営することで、王権の正統性を誇示したのだった。

#### 4. 藤原京の建設

694(持統8)年12月、王権は飛鳥の地から新たに建設した巨大な藤原京に遷った。飛鳥の谷から広闊な藤原の地への脱皮は隋を滅ぼして東アジアの覇権を握った唐に備えた「近代化」であり、国際情勢の変化と唐の律令制に対応した国作りの一環だった。

それとともに自らの新都を誇示し、さらには始祖の事業を顕彰する意図がそこにはあった。藤原京は碁盤目の条坊制による初めての都城で、その建設は本薬師寺跡の調査など考古学的調査の結果からみて、680(天武10)年代以前に天武主導で始まったことは確かである。壬申の乱(672)からわずか5年ほどのようだ(天武5年是年条)。

その規模は十条十坊(約5.3km・10里)説、十二条八坊説などがあり細部はまだ確定して

# 皇室系図

(アルファベットは即位順)

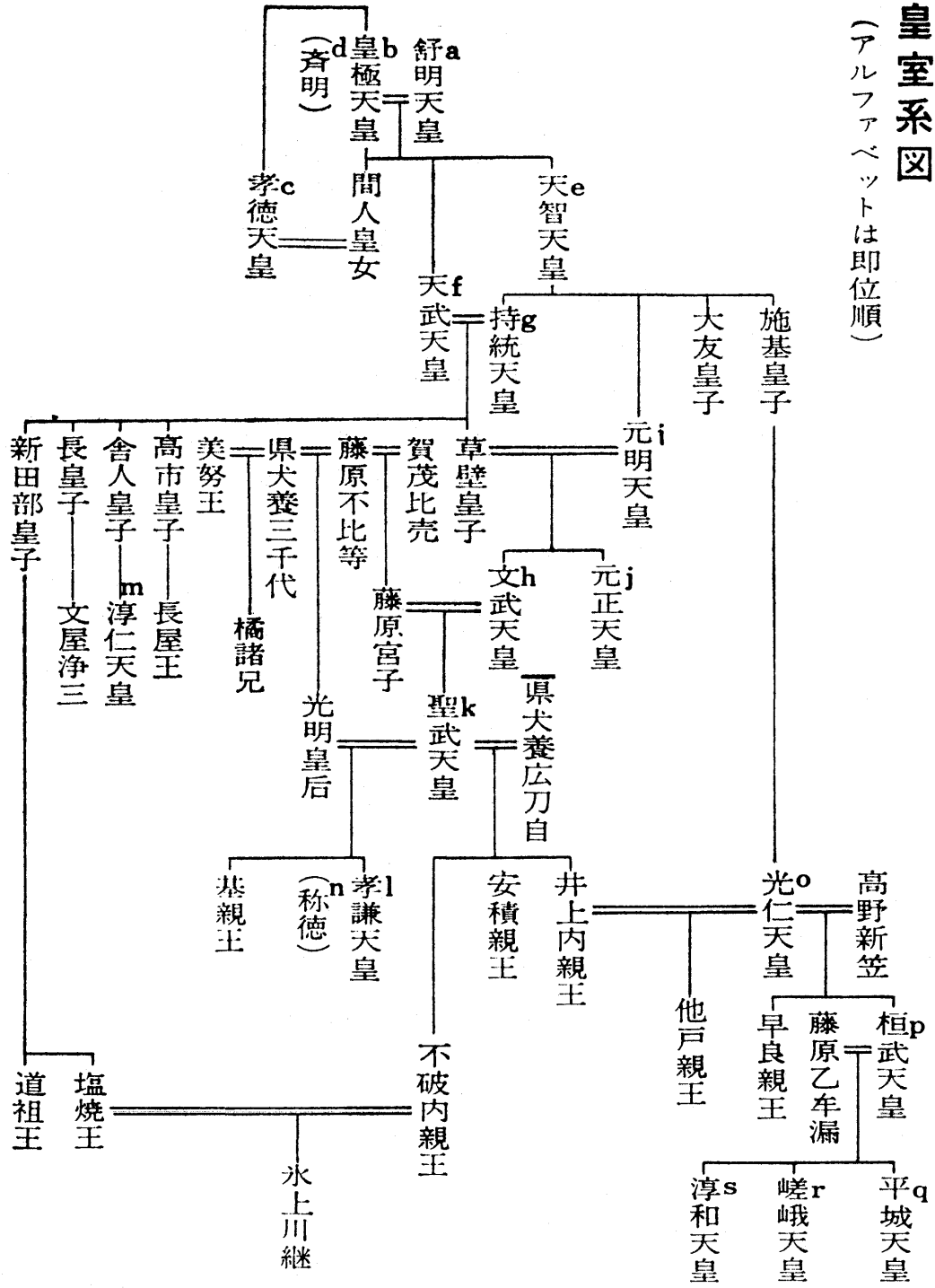


図3 舒明天皇をめぐる血筋

いない。しかし、このうち東西は少なくとも十坊分（約5.3km）はあり、北端の遺構もほぼ明らかとなった。

それらを含めると藤原京は現在の奈良県橿原市を中心とし、東は桜井市の西南部、いわゆる磐余の地とし、南は一部が未確定だが現明日香村の一部にまたがる広大なものとなる。

その占地はまた、奈良盆地を南北に貫く官道である下つ道、中つ道、難波と東国とを東西に結ぶ横大路を取り込んだものとなっている<sup>〔注10〕</sup>。

これら官道の利用は単に交通の便を求めたものだけでなく、自らがよって立つ王朝の始祖を顕彰する意図から、舒明の故地を京城内部に取り込んだ結果だった。

即位した舒明天皇は飛鳥岡本宮を造営したが、636（舒明8）年に罹災。同年に田中宮に遷り、次いで639（舒明11）年に百済川の辺りに百済大宮と百済大寺を造営した（舒明11年7月条）。そして640（舒明12）年10月に百済宮に遷り、翌641年に没した（舒明13年10月条）。その間の640年4月には、伊予（愛媛）からの帰途、一時厩坂宮に滞在したという。

このうち、636（舒明8）年に遷った田中宮の推定地は橿原市田中町付近にある。田中廃寺周辺が有力推定地である。厩坂宮も不明だが、宮の名の厩坂は書紀応神3年10月条に厩坂道がみえ、同15年8月条の地名伝説には百済王が貢じた良馬を軽坂上厩に飼育したことが地名の由来とみえ、軽に近接した。軽の地名は現在の橿原市大軽町に、厩坂はその北の石川町に残る。近鉄橿原神宮前駅東口から下つ道（国道169号）を隔てた東側付近である。宮跡が未詳の両宮に対し、後者の百済大寺の所在地は発掘調査の結果、ほぼ明らかとなった。

奈良県桜井市吉備に所在する「吉備池廃寺」こそ、百済大寺である<sup>〔注11〕</sup>。そこは磐余のなかでも磐余池の伝承地として有力な堤跡（桜井市池之内）の東北、約500mほどの地であり、後の藤原京では東京極の坊となる（平城京風には左京五坊）。

百済大寺の位置が確定すれば、他方の百済大宮の位置が推定ができる。百済大宮と百済大寺との位置関係は、書紀に「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」とある。すなわち百済川を挟んで東側に寺が、西側に宮があった。百済大宮跡は百済大寺跡の西方に位置するのだ。

現在、吉備池廃寺の西には南北に幾筋かの谷がならぶ。すぐ西側には香具山東麓に源を發する磐余池伝承地からの谷筋があり、「吉備池」廃寺の名前が示すように寺域の西側は谷地形にあたっている。この谷筋を超えた西側には、香具山西北麓の埴安池推定地からのびる谷筋がある。

そこで吉備池廃寺西方で、宮殿に相応しい高燥な場所を求めると、香具山北麓の橿原市膳夫町付近か、埴安池を隔てた藤原宮東北地区が有力になろう。これには橿原市法花寺町付近と考える法花寺町説がある<sup>〔注12〕</sup>。

百済大宮跡が藤原宮の北東部付近の下層にあったとすると、百済大寺（吉備池廃寺）は藤原京左京の東京極付近にあたる。さらに、罹災した岡本宮から遷った田中宮推定地（橿原市田中町）もまた、右京の南京極、朱雀大路付近に近い。厩坂宮はその西側で下つ道に近接し、いずれも京城内部に含まれる（図4）。

これは単なる偶然ではなく、天武・持統による藤原京の造営（遷居は694年）は巨大な新国家建設の象徴であるとともに、飛鳥の谷を本格的に開発し、都とした偉大な始祖の事績



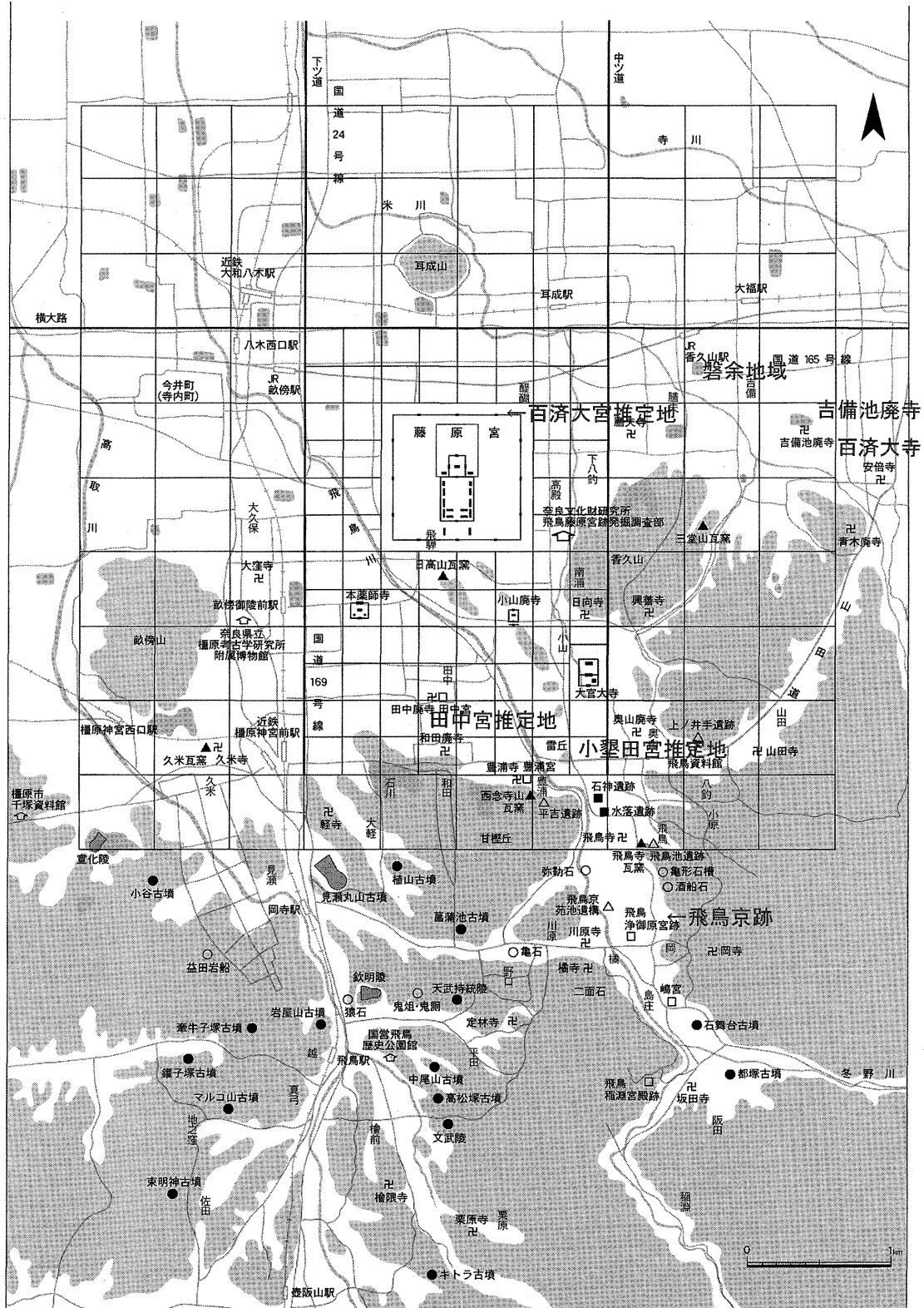


図4 磐余・飛鳥・藤原地域の遺跡

を含めて顕彰する事業だった。あるいは、東西十坊は百濟大寺跡を左京域に取り込むための工夫だったのではないか。

持統紀には新都を意味する「新益京」(持統5年〈691〉10月条、持統6年〈692〉正月条)の語がみえる。これを岸俊男説は、従来の飛鳥の地を拡大して新たに益した京と解した。ここに述べたことからすると、その解釈はまさに正鵠を射ていた。このように考えた時に意味をもつのが持統天皇の御製である。

原万葉集の藤原宮治天下天皇代(持統天皇)は、天皇御製歌で始まる。

春過ぎて夏来るらし白妙の衣干したり天の香具山(歌番号28)

いうまでもなく香具山の歌である。その解釈には諸説があるが、この歌が持統天皇代の最初に、しかも御製歌としてあることを考慮すべきであろう。これは飛鳥を象徴する香具山ではなく、藤原京のシンボル大和三山の一としての香具山の歌である。

すなわち、新都藤原京の最初の国見の歌であり、持統天皇は御代の始めを天武とともに建設した藤原京の賛歌で飾ったのだ。そして、この歌は原万葉集で実質的な劈頭歌である舒明の御製歌(歌番号2)に対応し、一方が新都飛鳥京の、他方は自らの新都藤原京の賛歌としてともに響き合う仕掛けだった。

## 5. 平城京へのみち

710(和銅3)年、都は奈良盆地北端の平城京(710-784)に遷る。壬申の乱直後の困難な時期に建設を開始した藤原京は、694年の遷都から僅か16年でその使命を終えた。これは古くからの謎だったが、新都平城京の建設は統一的な全体計画があって、粛々と遷都事業を進めたというのではなく、行き当たりばったりの計画だったようだ。

平城京(710-784)は長安城と相似形で面積は1/4の九条八坊とし<sup>[註13]</sup>、宮城を京城の北面中央に配置する北闕型をとる。対する藤原京は京の中心部に宮城を配する回の字型(あるいは井字型)だったから、新都のプランは長安城により近い(図5・6)。

この平面形が平安京(794-1185)の原型だから、北闕型で九条八坊が古代都城の標準といえよう。

藤原京短命の謎について、かつては701(大宝元)年の『大宝律令』制定を契機とする官僚機構の整備に対応するもの、との説が有力だった<sup>[註14]</sup>。しかし、これは藤原京の規模が平城京の1/2、面積で1/4という岸説藤原京を前提としたものだった。

藤原京が平城京を凌駕するほどの巨大な都城であることが判明した今日、この説は立論の根拠を完全に失った。藤原京と長安城の構造の基本的な違いこそ、平城京遷都の真の動機であり、16年という藤原京短命の最大の理由だった。

平城京遷都の議はすでに707(慶雲4)年2月19日には始まっていたようだが(続日本紀同月戊子条)、これは701(大宝元)年の『大宝律令』制定を契機としてこの年任命された粟田真人等第7次遣唐使(702-704)の帰国後のことであり、真人等の報告によって両都

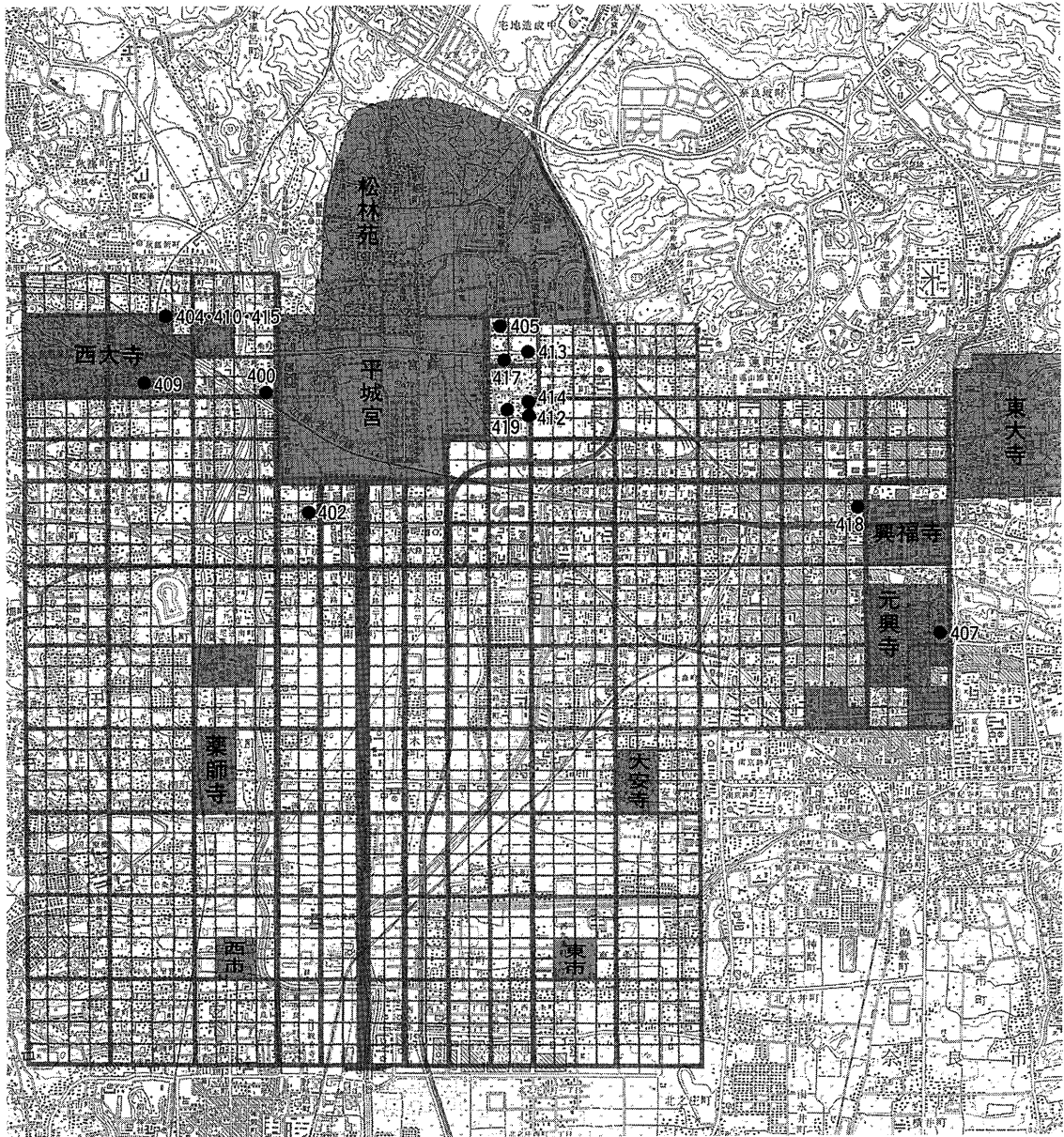


図5 平城京の平面形

の構造がまったく異なることが判明、それによって長安城と同じ北闕型の新都建設へと雪崩を打ったのだろう。

翌、708（和銅元）年2月には元明女帝による平城京遷都の詔があり、造宮官司の任命や工事の進捗を伝える記事が続き、710（和銅3）年3月10日に平城京に遷るから（続日本紀同月辛酉条）、新都の建設は順調だったようにもみえる。ところがそれほど単純ではなかったようで、遷都時には平城京の規模すら決まっていなかった可能性がでてきた。

平城京が九条八坊であることは幕末の北浦定政『平城宮大内裏跡坪割之図』（1852年）以来の定説だが、実際には710年の遷都当初はまだ南北が九条ではなく十条だったようなの

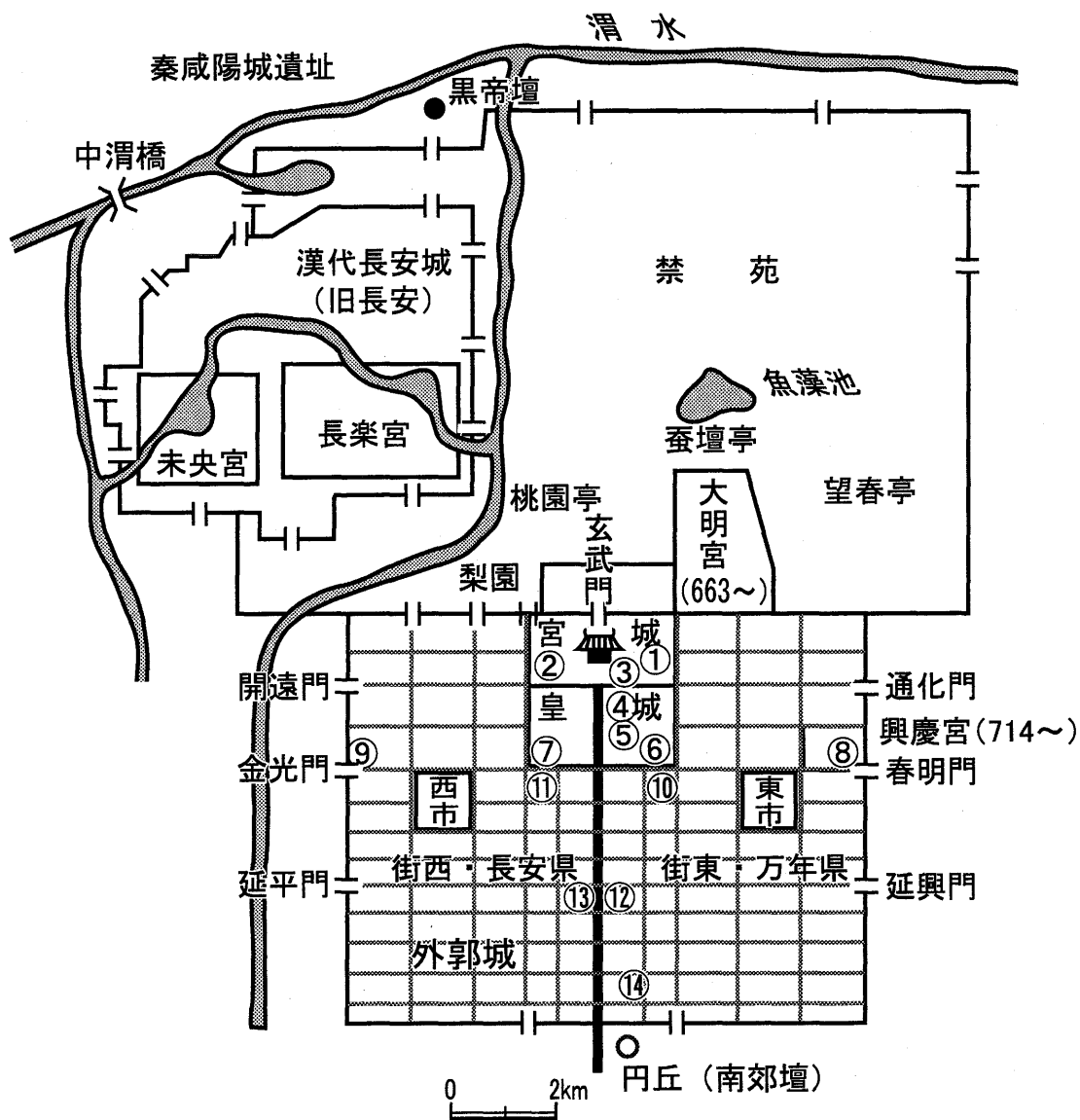


図6 唐長安城と禁苑の配置

だ。

左京の南京極の南、大和郡山市下三橋遺跡では大形商業施設建設の事前調査によって、京南特殊条里の下層から平城京十条関連遺構と掘立柱の羅城遺構を検出した<sup>[註15]</sup>。

十条関連の条坊遺構は739(天平11)年頃までに廃絶。前後して九条大路を南京極とし、羅城を建設したのだという。言い換えると、この段階で初めて九条八坊になったことになる。これが事実なら、北闕型の新都ありきで外形は暫定プラン(藤原京十条十坊説では、藤原京プラン)で建設を始め、739年頃までに長安城に似せて九条八坊に縮小。その減少分を外京建設でカバーしたことになる。

そして、長安城のプランに関して704年の粟田真人帰国時には北闕型という以外に詳細な情報はなく、計画変更はその後の遣唐使の報告によったと考える他ない。30数年ぶりに唐土に赴いた粟田真人は唐の最新情報や文物を多数持ち帰ったようで、その一部が高松塚古墳の海獣葡萄鏡とする王仲殊説は半ば通説化している。しかし、この一件からすると過大な評価は禁物なようだ。いずれにしても、新都建設は「海図なき航海」に似たものだった。

## 6. 天武・持統直系の強調

平城京の建設は王権に新たな課題を突きつけることになった。平城京は舒明天皇の事績とは縁が薄い奈良盆地の北端に位置するから、もはや新都に舒明の事績を持ち出すわけにはゆかない。代わって前面に押し出したのが、天武・持統直系（嫡系）という血統の論理である。

再び橋本説にもどると、「原万葉集」の後継計画は聖武天皇（724-749）の即位を控えた神亀頃で、皇親政治の再現者である長屋王が、文武遺児の聖武（首太子）即位を控えた時代に企図したという<sup>〔注16〕</sup>。文武天皇の後には中継ぎとして草壁妃であるとともに文武実母の元明天皇が（707-715）、次いで娘である元正天皇（715-724）が立ったから、一部勢力にとって聖武即位は天武・持統直系（嫡系）の男子天皇誕生として慶事だった。もっとも、長屋王は729（天平元）年2月、その聖武天皇と藤原氏に謀殺されるからこれは歴史の皮肉という他はないが。

進んで平城京遷都自体、聖武（首太子）即位のための政治体制造りとする指摘があるほど<sup>〔注17〕</sup>。

聖武の後に即位する孝謙・称徳天皇など天武・持統系天皇の宣命には、元明女帝の「不改常典」を除いて、天武・持統直系（嫡系）の強調がみえる。前者の「不改常典」については皇位継承法で、天武・持統直系（嫡系）の法源を天智天皇に仮託した、とする説を始め様々な解釈があり、いまだ定説をみない<sup>〔注18〕</sup>。

いずれにしても天武の死後、持統天皇が覇権を確立したため、後継者は天武・持統天皇直系（嫡系）を強調することで正統性を維持したのだ。

770（宝亀元）年、天武系の皇統は両天皇の子である「岡宮御宇天皇（草壁皇子）」（天平宝字6年6月3日宣命）直系を任じた称徳女帝をもって絶え、光仁天皇（770-781）が誕生した。同じ舒明を始祖とする天智系であり、その子桓武天皇（781-806）はのちに長岡京、平安京（794-1185）と相次いで造営する。その遷都理由に辛酉革命説があることは興味深い<sup>〔注19〕</sup>。

辛酉革命説とは、辛酉の年には天命が<sup>あらた</sup>革まる、すなわち帝王が変わるという中国の革命理論である。桓武天皇がこの説を意識した背景には天武血統から天智血統への転換があったというが、藤原京という条坊制都城の成立からほぼ100年。始祖はいうにおよばず、血筋の論理もそのまま持ち出すには時代遅れで、中国思想で再武装したこととなろうか。

この平安京をもって古代都城は終焉するから、舒明王朝の影響は7世紀前半の飛鳥京以降、主要な古代都城全体におよんだのだった。

## 補記

ここに述べた舒明王朝の考え方に立つと、古事記編纂に関わる問題の一が解決する。古事記はいうまでもなく、日本書紀とともに8世紀初頭に成立した史書である。古事記は序文によると、天武天皇の命によって稗田阿礼が皇帝日継（帝紀）、先代旧辞（本辞）を誦習。これを元明朝の和銅4（711）年9月18日にいたり、太安万侶に撰録させたもので、献上は和銅5（712）年正月28日のことである。

古事記は全3巻は上中下からなり、上巻は神代の、中巻は神代と人の、下巻は人の代の物語で「天地開闢より始めて小治田の御世に訖る」とあって、「小治田御世」すなわち推古天皇の御世で巻を終える。天地開闢から始まることは他方の日本書紀（養老4〈720〉年成立）も同じであるが、こちらはそれより長く、全30巻を持統天皇の巻で終える。ほぼ同じ頃に成立した二書であるのに、一方は推古朝、他方は持統朝で終えた理由は何か。

これについてはさまざまな説があり詳細は省くが、古事記が推古朝で閉じることは舒明王朝の考え方からすると、むしろ当然のこととなろう。

中国では新たに王朝を樹立した天子は、新都を建て、度量衡を定めるなどの諸事業とともに、前王朝の史書を編纂した。それは王権の正統性を主張するためであった。

古事記は天武天皇が編集を命じたことが示すように、天武朝に企図されたものである。推古天皇は6世紀の王権が依拠した磐余（桜井市東南部、のちの藤原京左京城）から飛鳥に移り、それを受け継いだ舒明天皇はこの谷を「飛鳥京」として開発する。ただし、ここで両者を同一視することはできない。それは推古の小治田（小壘田）宮は飛鳥の入り口ともいべき雷丘周辺に構えたのに対し、舒明はさらに谷奥に進んで岡に岡本宮を構えたことである。ここは後に飛鳥京といわれる宮殿と寺院の集中地になる。

そうした事業は舒明の皇后であった皇極（重詔して斉明）天皇、さらに子の天武天皇と後の持統天皇が強力に推進したのであり、後者は最終的に、巨大な藤原京を建設するとともに律令国家の基礎を築いたのである。これらの点からすれば、舒明天皇を始祖とする王朝の事業内容は推古朝と大きく異なる。

加えて天武天皇には新王朝を樹立したとする自負があったであろう。その源は壬申の乱（672）で、兄の天智天皇亡き後の近江朝から王権を篡奪したこと。中国では王権の樹立は常に熾烈な権力闘争によったのであり、新王権は先に述べた様に新都を定め、その正統性を主張するため前王朝の歴史書を編んだ。

この観点からすると、古事記の編纂は前王朝の総括、藤原京は新都建設の事業となろう。ここで自らを始祖とするのではなく父天皇に仮託したのは、天武天皇の権力基盤がまだ盤石でなかったためであろうか。

古事記が述べるのは「上古」の事である。上古は歴史区分の用語として大化改新まで、中古は平安時代、近古は鎌倉・室町時代を意味するが、やはりおおむかし、上代といった意味であり、さらに深い意味があるという。

西谷地晴美氏は古事記の「上古」はいま（8世紀初頭の日本書紀編纂時）とはつながらない過去のこととし<sup>〔注20〕</sup>、神野志隆光氏もやはり「八世紀初の律令国家成立時において、推古天皇以前が、直接自分たちとつながらないものとして「古」であった。」<sup>〔注21〕</sup>と主張する。

この説によると、推古以後の舒明天皇に始まる時代は現代、すなわち「中古」であって、「上古」と自分達は直接つながらないこととなる。これは右に述べたことと矛盾しない。実際、古事記編纂を命じた天武天皇、その筆録を太安万侶に託した元明天皇（嫡子草壁の妃）はともに舒明王朝に連なる人々であった。

このようにみると、日本書紀は「古」の次ぎに位置する自らの歴史、「中古」の歴史でなければならない。それが持統女帝で閉じることは、天武没後にその事業を引継いだ女帝が新都藤原京を完成させ、律令国家の基礎を築いたことを強く主張するからであろう。ここではともに夫の天皇に先立たれた皇后が、未完の大事業を完成させた点で、舒明天皇—皇后皇極（齊明）と天武天皇—皇后持統が対応しているのである。

では、天武・持統天皇が心血を注いだ新国家の運営は誰が引き継いだのか。委ねたのは嫡子草壁皇子の遺児、文武天皇であった。日本書紀を継ぐ続日本紀が文武天皇から巻を起すことがこのことを雄弁に、物語っている。

#### 注

〔1〕 岸俊男「飛鳥と方格地割」（『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988年、初出1970年）

〔2〕 契沖『萬葉代匠記』（築島裕ほか編『契沖全集 第7巻』岩波書店、1974年）

〔3〕 橋本達雄『万葉集の編纂と形成』（笠間書店、2006年）p.27

〔4〕 前掲〔注3〕書、p.594

〔5〕 岸俊男「画期としての雄略朝—稲荷山鉄剣銘付考」（『日本古代文物の研究』塙書房、1988年、初出1984年）

〔6〕 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』（岩波書店、1965年）

〔7〕 前掲〔注1〕論文

〔8〕 門脇禎二「『田身嶺』について」（『飛鳥文化財論攷』納谷守幸氏追悼論文集刊行会、2005年）

〔9〕 明日香村教育委員会文化財課編『酒船石遺跡発掘調査報告書』（明日香村、2006年）

〔10〕 奈良文化財研究所編『飛鳥・藤原京展』（朝日新聞社、2002年）p.180

〔11〕 奈良文化財研究所編『吉備池廃寺発掘調査報告—百済大寺跡の調査』（奈良文化財研究所学報第68冊、2003年）

〔12〕 千田稔『古代日本の王権空間』（吉川弘文館、2004年）

- [13] 井上和人「平城京形制の実像」(『東アジアの都市史と環境史—新しい世界へ』(科学研究費基盤研究(S)「歴史的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題」主催国際シンポジウム2005配付資料、中央大学文学部、2005年)
- [14] 青木和夫ほか校注『続日本紀1』(新日本古典文学大系12、岩波書店、1989年) p.386
- [15] 山川均・佐藤重聖「下三橋遺跡の発掘調査について—古代都市平城京に関する新知見」(『条里制古代都市研究』22、2007年)
- [16] 前掲〔注3〕書、pp.594-595
- [17] 林陸朗「平城遷都の事情」(『国史学』81、1970年) pp.1-17
- [18] 前掲〔注14〕書、pp.382-384「天智が不改常典と初め定めたと伝えられる法」
- [19] 林陸朗『長岡京の謎』(新人物往来社、1972年)
- [20] 西谷地晴美「記紀の読み方—神野志隆光氏の所論によせて」(奈良女子大学21世紀COEプログラム研究会「古事記・日本書紀はいかに読むべきか」口頭報告予定、2007年12月22日)
- [21] 神野志隆光『複数の「古代」』(講談社現代新書1914、2007年)

#### 図出典

- 図1 飛鳥京の宮殿と寺：奈良文化財研究所編『飛鳥・藤原京展』(朝日新聞社、2002年) p.181 (一部加筆)
- 図2 北魏洛陽城の宮図：渡辺信一郎「六朝隋唐期の太極殿とその構造」(『宮中枢部の形成と展開—大極殿の成立をめぐる』第1回都城制研究会配付資料、奈良女子大学21世紀COEプログラム、2007年) p.14、図2-1
- 図3 舒明天皇をめぐる血筋：八木充『古代日本の都—歴代遷都の謎』(講談社現代新書351、1974年) p.129
- 図4 磐余・飛鳥・藤原地域の遺跡：図1と同文献、p.180 (一部加筆)
- 図5 平城京の平面形：『奈良文化財研究所紀要2007』(奈良文化財研究所、2007年) p.129
- 図6 唐長安城と禁苑の配置：妹尾達彦『長安の都市計画』(講談社、2001年) p.142、第41図